

能楽雑感から その1

(以前に「謡い・仕舞覚書帳」に投稿されたもの再編してみました。)

謡の要諦、声量について、
紛らわしいこと、好き嫌いについて、
同好会の功罪、無本謡の付け方、
暗記の極意、アマチュアの務め、
天狗もの、故・清水要之助師

～ 謡の要諦 ～

私は、アマチュアが趣味としての謡いを謡うときの要諦の第一は、本を間違わないで読むこと(但し、無本の場合は多少の間違いはご愛嬌というものでしょう)、第二は、その流儀の節(ふし)を正確に謡うことだと思っています。

その基本が先ずあって、その上で、情感とか強弱とか緩急を織り込むことによって芸術性が高められていくものだと思っています。他方、先天的に個人差のあるもの、例えば音程の幅(鍛錬によってある程度は幅の拡大は可能ですが)とか、声量の豊かさとか、美声であるかどうかとかは、謡の上手、下手の評価に組み入れるべきではないと考えます。

また、年齢とともに声量も落ちてきますし、声の艶も無くなっていくのが通例ですが、聞く側にとっては、その人の年齢とか、キャリアについてを思いやる優しさ、度量ということも必要です。また、そのことが礼儀でもあります。

なお、いま述べたことは、あくまでも役謡とか独吟の場合であって、地頭ということになると全く別の観点から、評価したり論じなければならないことは言うまでもありません。

～ 声量について ～

先日、さる同好会のあとの飲み会で、長老のAさんが、ベテランのBさんに対して、今日の貴方のワキの謡はお座敷謡だよ。もっと張って(声量を上げて)謡わなくてはいけないのではないかとコメントしました。実は、Bさんのワキで私がシテを謡わせて頂いたのですが、Bさんは、控えめに、それでいてとても確りした謡を謡って下さり、私のイメージしていたその曲(前場はかなり悲しい曲趣でした)のシテ謡びつたりで、謡い易すかったのです。

敢えて、その場で反論しませんでしたでしたが、私の意見は次の通りです。

- ①ワキは曲趣を踏まえて、シテが出やすいように雰囲気作りを役目がある。或る意味で、素謡に最初に登場するワキは、その一番のリード役でもある。
- ②大きな声で謡えばそれで良いわけではない。たとえ音量は小さくとも、ワキらしい力強い謡をすることは出来るし(Bさんはまさしくそうでした)、そのことがむしろ肝要である。
- ③謡会の場合、会場の広さ、参加者の多寡などに応じて音量や謡いぶりは臨機応変に変えるべきである。

～ 紛らわしいこと ～

最近、謡いにつて人と話していて、気が付いたことがあります。その一つは、謡本についての全体構成（例えばワキの次第、名乗り、シテ一声、サシ謡等々）を予め承知しておくことが上達につながるとは思っていますが、これをあまり意識されない人が意外に多いように思われます。また意識しても、その意味合いを正しく認識していない向きも多いようです。

更に、意味を認識していても、よく誤解されるのが「サシ」と「サシ謡」です。両者は字は似ていても謡い方は別物です。（言うまでもなく「サシ」はクリ、サシ、クセのワンセットの一つで、サラサラと淀みなく謡うのが基本とされている）

もうひとつ、誤解され易いのが「高い／低い」という言葉。これだけでは音量（声量）のことなのか、音程のことなのか分かりません。声量ならば大きい声／小さい声と言うべきで、音階のことならば、音階が・・・とか、キイが・・・とか前置きをしないと、とんでもない誤解を生ずることがあるようです。

～ 好き嫌いについて ～

謡い上達の秘訣については、一つ一つの節扱いを正確に自分のものにしていくことや、声の鍛錬を先ず行うことなどいろいろあると思いますが、自分の経験からして、謡いにつて好き嫌いを持たないことが一番大切なことではないかと思っています。

何故なら、自分の謡い人生で、お上手だと思った方は一様に謡いにつての好き嫌いがありません。謡いの好き嫌いには次の三つのパターンがあります。

一番目は、「柔吟は好きだけれど剛吟が嫌い」、

二番目は、一番目のパターンに抒情的な感情が付加されたもので、「四番目が一番好きで、初番物が苦手」、

そして三番目は、曲のストーリーに個人的な価値観が働いて「この曲が好きでこの曲が嫌い、例えば松風は好きだけど、蟻通は好きでない」などです。

私は、稽古の最初から、好き嫌いを持っては駄目だと指導されましたので、ほとんど好き嫌いはありませんが、三つ目のパターンとなると仲光や七騎落などあまり好きでないものも皆無ではありません。

ただ、我々アマチュアにとっての謡いはしよせん趣味の問題であり、会も遊びが目的ですから、楽しむことが大切であり、好き嫌いをなくそうと我慢してまで上手にならなくても良いではないか、とも思ったりします。

～ 同好会の功罪 ～

現在、私の属している謡曲・仕舞のアマチュア同好会は白謡会を含めて四つです。一時は、その倍ほどに参加していたのですが、仕事優先（今も勿論そうなのですが）の観点から、絞りました。同好会は、結論から言えば、技量の向上にとっても役に立ちます。

能の技量は人によって様々であり、また、能は芸術であり、故に表現の仕方は無限ですから、他人の芸を冷静に眺め、自分なりに評価したり、ときには真似の出来る絶好の機会です。従って、

機会があれば複数の同好会に属して、色々な人の様々な芸を見聞することが有益だと思います。

但し、同好会と云えども人間社会の縮図でもありますから、良いことばかりではありません。集団には、とかくボスが生まれがちで、その結果権威を振るう人やそれにへつらう人も出てきますし、目くそが鼻くそを笑うような「教え魔」も居ます。嫉妬もあるでしょう。

そのような兆候が見られたら、それなりの対策が必要です。いずれにせよ、同好会は利用するに越したことはありません。

～ 無本謡の付け方 ～

先日、会員 10 人ほどの同好会でちょっとした騒ぎがありました。素謡の合間にAさんが独吟を謡ったのですが、しどろもどろになったので、前で聞いていたBさん（女性）が助け船を出すつもりでその部分の謡いを謡いだしました。それがかなりしつこかったからでしょう、突如、Aさんが切れてしまって、「もうやめた！」と言って自席に戻ってしまいました。

もとはと言えば、しどろもどろになって謡いが出てこなくなったAさんに原因がありますが、Bさんの付け方が性急で、且つ調子に乗って一緒に謡うような感じになってしまったのも如何なものかと思いました。

無本謡いを付ける（素謡の場合、付けるのは地頭の役割）タイミングはかなり難しいのですが、今度のように、内輪の会で謡う人が、聞く人たちと向き合っているときは、本人の顔つきの様子で判断出来ますが、素謡のときのように、付ける人が謡う人の後ろに位置している場合は、概ね1秒くらいの間かなと思います。特に上手な謡いで観客を引き込んでいるようなときには、あまり間を空けない方が良さそうです。

しかし、一番大事なことは、無本で謡う人は付ける人を自分で認識しながら謡うことであって、素謡なら地頭に予め挨拶をしておくとか、独吟なら付ける人（後見）を決めて予めお願いしておくべきことなのです。無本で謡う場合は常に付ける人との連携プレーなのです。

～ 暗記の極意 ～

所属している同好会の3月の例会で、独吟で「梅」を出すことになっています。自分から候補曲を指定したあとで、「しまった！」と思ったのですが、後の祭りでした。「梅」は、ご承知の通り、格調も高く、素晴らしい曲なのですが、難としては、会などに出る頻度が極めて少ないことに加えて、詞章が難解なことでも知られています。

唯でさえ、普段あまり謡いなれていない上に、「かなざ（神事）」とか、「おおんたから（人民）」とか、「あまのたくひれ（天の楮領巾）」とかいった詞が次々出てきますから、大変です。

では、どうしたら暗記できるのか。皆さんのご意見も是非聞いてみたいところですが、私の実践方法は、とても平凡なことながら以下の3点です。

1. 徹底して謡いの意味と文章構造（掛詞など）を理解する。
2. その上で、覚えようと言う強い意志を持つ。暗記の意思がないと、何度謡っても覚えられません。
3. 謡いのコピーを身近なところに常時置いて、暇さえあれば覚える努力をする。

蛇足ですが、謡を覚えるときには詞章と節付けだけでなく、「引き」（ヤ、ヤヲ、打切など）も併せて記憶した方が良さそうです。

～ アマチュアの務め ～

能楽は平成 13 年 5 月に、ユネスコで世界無形遺産の制度が設けられると同時に、日本では、文楽や歌舞伎に先駆けて、これに指定されました。それはそれで結構ではあるものの、手放しで喜んではられません。

「遺産」とは、大切でありながら保護しないと消えて行ってしまうもので、国際的な制度で「遺産」として指定されたと言うことは、謂わば、保護監察下におかれたのと同じことのように思います。ちょっと悪い譬えかも知れませんが、動物に例を取ればパンダやトキのようなものです。

我が国が誇るべき伝統芸能である、素晴らしい能楽、その構成要素である謡いと仕舞、これを如何に現在確実に進みつつある衰退から守ったら良いのでしょうか。

高い山ほど裾野が広いのですが、能も、先ずは我々アマチュアが頑張って、同好の仲間を増やしていかななくてはならないと思います。

～ 天狗もの ～

今日は同好会で「善界」（ぜかい・・・とは読みません）のワキを務めました。善界は、仕舞では動きが華やかなため、良く舞台に出ますが、素謡ではあまり出ないようです。

しかし、柔吟と剛吟が混在していたり、歯切れのよい運びであったりと、なかなかの佳曲ですから、もっと素謡で出ても良いと思います。

さて、クイズですが、「三天狗」は本曲と鞍馬天狗とあともうひつは何でしょうか。また、「四天狗」とは、この三曲に加えて何でしょうか。（回答は次回に）

～ 故・清水要之助師 ～

土曜日は、藤沢での同交会に参加しましたが、藤沢には、故・清水要之助師のお弟子さんで、まだお元気な方が何人かおられて、孫弟子の方たちも含めて、松風会（要之助師主宰の素人会）を引き継いで活動を続けています。

観世定期能で、藤波順三郎師と共に毎月地頭を勤められていた時期がありましたが、謡いに関しては熱狂的なファンの方も大勢おられたようです。

私が参加している藤沢の会の長老メンバーもそのお一人で、清水師のお話を時どき聞かせて頂いていますが、この日も、会後の飲み会で、清水語録の一つを聞かせて貰えました。

即ち、「謡は、節よりも状況を把握しろ」という言葉です。ちょっと、誤解しそうな言葉なので敢えて意識しますが、「素謡で上達するためには、節だけ正確に覚えるだけでは駄目で、その謡いのベースとなっている状況、舞台上の情景を念頭に置きながら、謡い方を工夫しなさい」と言うことでしょうか。

謡三昧でも書いたような気がしますが、謡であれ、詞であれ、独り言か、相手があるのか、嬉

しいのか、哀しいのか、ぼやいているのかを良く理解した上で話りたいものです。

～ 錬声会 ～

狂言師・先代の野村万蔵の著作（私の愛蔵書）に「夏に技、冬に声」という随筆集があります。著者の意図は、動作がとかく鈍くなりがちな暑いときに技を磨きなさい、寒風が吹きすさんで咽喉がカラカラになりそうな時期にこそ声を鍛えなさい、というものでしょう。これこそ玄人が意図しなくてはならない修業の法則です。

白謡会はアマチュアの集いですから、野村師の意図を少し緩めて、夏に声を鍛える機会をこれまでも何回か持ってきました。今年も、来る 16 日に久良岐舞台で歌仙会形式での素謡を試みます。

歌仙会と言うのは、36 歌仙にちなんで、玄人が早朝から夜にかけて 36 番の謡を謡う、声の鍛錬の機会と聞いていますが、私はまだそれを聞く機会に恵まれていません。これに近い、半歌仙会（省略なしの素謡 18 番）は、22 歳のとき、鎌倉の建長寺で経験しました。土蜘蛛のシテを担当したことを覚えています。

アマチュアの謡は楽しむこと、楽しめることが第一義と心得ていますから、声量が無くても一向に構いませんが、もしも、謡を上達しようと思ったら、或いは地頭を勤めようと考えたら声を鍛えなくてはならないことは言うまでもありません。

何事も上達しようと思ったら、苦しみを味わわなくては願が叶う筈ありませんが、謡も例外でなく、謡上手と言われるような人は、一度は咽喉が破れるのではないかと思うまで声を出し続けた経験がある筈です。

～ ベルテック声法（唱法） ～

昨日のテレビで、私の好きな女性ボーカルグループ「アバ」を話題に取り上げていました。

会話の中で、耳を引いたのは、「アバ」の声量が豊かなのと、高音域が広いのは、ベルテック声法を体得しているからだというくだりがあったことです。「ベルテック声法」という言葉に馴染んでいなかったのでも、早速、調べてみました。其の結果、「ベルテック」は「ベルト」の形容詞で、「ベルト」とは、ウィキペディアによると、「特に中高音域で声量のある発声によって得られる特殊な響きを持った声質、テクニックであり、このテクニックによってより力強い感情を歌にこめることが出来る。

ジャンルとしては、R & B の女性ボーカルによく見られる。ベルトで歌うことが出来る歌手をベルターと呼ぶ」とあり、生理学的な説明としては、息漏れを他の発声法と違って最小にする、胴体の筋力を最大に保つ、咽頭を安定させるため、頭から首の筋をつなげる、咽喉仏が高い位置にあること、咽頭筋を鍛え、声帯に力を入れないこと等を習得の心得として掲げています。

そして、「ベルト」の語源は「Belly」（腹部）らしいのです。何のことはない、要するに「腹式呼吸の声法」であるようです。咽喉をつぶしながら歌わなければ、一日中歌っても声が掠れることはありません。

私が、謡を始めて間もない頃、最初に手ほどきをしてくれた、大伯父から言われたことがあります。「観世流の謡は西洋のオペラの発声法である「ベルカント声法」と同じ発声で、腹から声を出し、声量豊かに歌うものだから、同じ日本の芸能である、声を作って歌う義太夫とか、四疊半で歌う小歌とは本質的に異なることを覚えておきなさい」と。

「ベルカント」唱法は、数百年の歴史をもつ、イタリアの伝統的な発声法で、少なくとも2オクターブの音域を自由に操れるものとされており、これまた、謡曲の腹式呼吸以外に考えられず、「ベルカント」の意味はイタリア語で「美しい歌」という意味ではありますが前掲の「ベルト」と基本的には同じであると考えられます。

～ 白足袋 ～

能舞台にあがる時は白足袋を履くことが鉄則になっています（仕舞は足袋なくしては物理的に舞い難いので、謡いの場合のことです）。3年前のことですが、地方の舞台で会の後、記念撮影をしましたが、その時に白足袋を履いていなかった方がいたらしく、幹事が舞台事務局に叱られたことがありました。

能舞台ではなく、それが畳敷きの謡いの会場であっても、白足袋を履く人がいます。私も、高齢者の方がメンバーに入っているときは、畳敷きの会場でも白足袋を持参します（但し、畳敷きの会場のときは足袋を忘れることが間々あります）。

思うに、白足袋は、能の稽古に関する形式上の最後の砦のように思われます。かつて稽古場の仲間だけの会で、幹事役が洋服姿で参加した人に、次回からは和服で来て下さいと注文を付けていましたが、いつの間にか、殆どの同好会では、背広・ネクタイ姿が一般的になりました。女性が舞台上に上がれない時代はつい100年前のことでした。

相撲が外人力士を採用するようになったときから国技ではなくなりましたが、謡の世界も、いずれは靴下で舞台上に上がって謡うようになる時が来るでしょう。それはそれで良いことかも知れないと思います。素謡の世界が無くなってしまふよりはましですから。

～ 謡稽古の要諦 ～

「夏に技冬に声」とは、先代野村萬蔵の著作の題名ですが、今日は猛暑のなか、素謡一番と舞囃子の稽古をしました。普段の謡の稽古では、一番を一人で謡いきることはあまりありませんが、謡の上達という点では、一番をきっちり謡うことがとても大切なように思います。

一番を謡いきることで、その曲のストーリーや場面展開や序破急を体得出来ますし、謡いに何よりも重要な集中力の維持の訓練にもなるからです。そして、会などでおシテ役が当たったようなときには、出来れば二三回、事前に全曲を謡っておくと気持ちにも余裕が出ますし、曲に対する理解度が間違いなく深まることになります。そのほか、一時間近く謡い続けることになるので、発声の鍛錬になりますし、正座の訓練にもなります。

忘れていましたが、何回か前に、3天狗のことをクイズもどきに書いたことがありますが、回答を忘れていたところ、会友のNさんから問い合わせがありました。私の聞き及んだところでは、鞍馬天狗、善界（ぜがい）、車僧（くるまぞう）で、大會（だいえ）を加えて4天狗のことです。